—海外に行ったことがありますか。
言葉の通じない国で心を伝えることの難しさ。
そして、自分の思いが伝わったときの何とも言えない高揚感。
それは、海外に行くことで知ることができる国際交流の醍醐味の一つです。
日本からはそう遠くない場所、アジア。
今年度、大津町はアジアに目を向けてみようと思います。
さぁ目を細めて眺めてみましょう。
空の向こうを。

特集 アジア元年

Special Edition
Asian first year

阿蘇の冠を手に入れた熊本空港と国際線一時休止の報道

「阿蘇くまもと空港」の愛称で、国内はもちろん海外にもＰＲを行っている熊本空港。その熊本空港が国際空港じゃなくなる？阿蘇くまもと空港について詳しく知り、国際線の状況についても知ってみよう。

熊本空港は、昭和46年に熊本飛行場（熊本市健軍）から現在地（益城町、菊陽町、大津町）に移転し、以来、県内外を問わず様々なアクセスの拠点として利用されてきました。平成20年度の熊本空港の乗降客数は３０４万５３４５人。九州の空港では３番目。全国の空港でも11番目の乗降客数を誇ります。その他にも成田空港と釧路空港と同じく全国で初めてＩＬＳ（※）ＣＡＴ－Ⅲ（計器着陸装置）を導入するなど、熊本空港は、県民が誇ることができる空の玄関口です。

また、九州新幹線全線開業を平成23年3月に控え、空の交流拠点である熊本空港にも世界に名高い「阿蘇」の名称を入れて、熊本を世界にアピールし、利用促進を図るために平成19年から、愛称を「阿蘇くまもと空港」としました。今では皆さんも馴染み深い名称になったのではないでしょうか。

阿蘇くまもと空港の国際線が無くなる？

そんなわたしたちが誇れる熊本空港。現在は、国際線と国内線の両方を運航しています。しかし、唯一の国際線である「熊本—ソウル線」を運営しているアシアナ航空が運休を検討していると聞きました。

アシアナ航空は、平成15年に「熊本—ソウル線」を就航。以来年間約3万5千～4万人の旅客者で推移していました。しかし円高ウォン安などの影響で旅客者数が減少。昨年度の旅客数が約2万8千人と就航以来、最低となったことなどが検討の要因となった模様です。それを受け、「阿蘇くまもと空港国際線振興協議会」（会長：蒲島郁夫熊本県知事）は3月15日に県庁で緊急役員・幹事会を開催しました。会の中で蒲島知事は熊本—ソウル線を維持することの理由に3つの意味をあげています。

「一つは、韓国との交流がとても深いものがあり、このソウル線を失うことの傷の大きさ、あるいは両地域に対してのマイナス面から、なくてはならないということ。もう一つは、路線を失うことで世界につながる熊本がなくなってしまう。今は、仁川（インチョン）空港を介してつながっている世界との関係が、ソウル線を失うことによってなくなってしまう。それは、経済効果も非常に影響があるということ。三番目が一番大事なもので、これは、熊本のプライドに関わるものです。ようやく新幹線が熊本に来て、熊本市の政令都市化も進んでいます。そして、熊本がこれから「品格ある熊本」を求めようとしているときに、アシアナ航空を失うということは、とてもシンボリック（編注：象徴的なものという意味）な面で、心理的なマイナスが大きいと思っています。この心理的なものはとても大きいんです。いろんな社会や経済というものは、期待で動きます。そして、ようやく熊本が、政令都市、新幹線で盛り上がっているときに、世界とつながっているアシアナ航空が運休ということになれば、熊本にとってとてもマイナス面が大きい」（会議録より抜粋）

阿蘇くまもと空港にとって国際線が存在することの価値は、熊本県としても多くの意義があるようです。わたしたちの空の玄関口である阿蘇くまもと空港を知ることでまちづくりや国際的な視点を持つことができそうです。

※ＩＬＳ　空港付近から誘導電波を発射し、視界が悪いときでも着陸する航空機を安全に滑走路上まで誘導する計器進入システムのこと。熊本空港周辺は、霧が多いためこのシステムにより自動着陸が可能になる。